

第3学年「社会」学習指導案

授業者 片山 元裕

2月20日（金） 3階D室 10:00～10:40

1 単元名 公園 ～「ボール遊び禁止」をどう考えるのか～

2 単元について

本単元では、公園における「ボール遊び禁止」というルールを手がかりに、身近な公共空間のあり方について考えていく。文京区では多くの公園でボール遊びが禁止されており、こうした状況は他の自治体においても広く見られる。子どもたちにとって公園は、日常的にかかわってきた最も身近な生活空間の一つであり、その利用ルールは、自分自身の経験や実感をもとに語ることができる題材である。

単元の第2時・第3時では、「ボール遊び禁止」というルールの是非について、自分の経験を出発点に思いを語り合う活動を設定した。賛成・反対と立場は異なりながらも、子どもたち一人ひとりが強い思いをもって語る姿が見られた。これは、公園という場が子どもたちにとって身近であり、自分の感情や考えを率直に表現しやすい存在であったからだと考えられる。話し合いの中では、ボール遊びをしたい友だちの思いに心が揺れ動く子どもや、改めて安全面に目を向け、ルールの必要性について葛藤する子どもなど、友だちとの関係の中で自己の考えを捉え直していく姿が見られた。

一方で、「球技禁止」というルールは、子どもたちの思いだけで是非を判断できるものではない。そこには、未就学児や高齢者、地域住民、区の担当者など、教室には直接存在しない多様な他者の立場や価値がかかわっている。そこで本単元では、自分たちの経験の範囲にとどまらず、公園を利用するさまざまな人々の存在や、文京区の置かれた地理的な状況にも目を向けながら、他者と自分との考えの違いに向き合う学習過程を位置づけた。

こうした学びを通して、子どもたちが、「ボールを使って遊びたい」「安全で落ち着いた公園であってほしい」といった、それぞれの立場から生まれる思いや状況に寄り添いながら考えていくことを目指す。たとえば、子どもにとっての公園の意味と、高齢者や幼児を連れた保護者にとっての公園の意味は必ずしも一致しない。しかし、その背景には、「心地よく過ごしたい」「安心して利用したい」といった共通の願いがあることにも目を向けていきたい。こうした気づきを通して、立場の違いを単なる対立として捉えるのではなく、それぞれの立場にある人々の思いや背景を踏まえながら、公園やその利用ルールをどのように考えるかを捉え直していく子どもたちの姿を目指していく。

本単元は、「球技禁止はよいか、悪いか」という一つの結論に収束させることを目的としていない。むしろ、対話を通して自分の考えが変化したり、あるいは変わらない理由がより明確になったりする過程そのものを大切にしたい。自分の考えを表現し、他者の考えを聴き、納得や違和感を体験する中で、子どもたちは自らの価値観を見つめ直していく。こうした、他者との関係を通して自己を省察し、次の思考へとつなげていく子どもたちの姿そのものを、本単元における重要な学びとして捉えていきたい。

3 学習指導計画（10時間目／全18時間）

- | | |
|-------------------------------------|----------|
| 第1次 自らの経験から公園のあり方やルールの是非について考える | …3時間 |
| 第2次 地理的な視点や歴史的な視点などからルールの意義や課題を検討する | …7時間 |
| 第3次 ルールの是非や公園のあり方について考える | …本時2/4時間 |
| 第4次 これからのより良い公園づくりに向けて、子どもなりの提案をつくる | …4時間 |

4 本時の学習について

(1) 本時のねらい

これまで学習した多様な立場や事例を踏まえ、「ボール遊び禁止」について考えることができる。

(2) 予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
1. 前時をふり振り返り、今日の問いについて確認する。	・子どもたちのこれまでの関心や学習のふり振り返りから、問いを設定する。
2. 自分の考えを記述する。	・これまでの学びを生かしながら、全員が自分なりの意見をもてるようにする。
3. みんなで話し合う。	・一人ひとりの考えに対して、みんなで耳を傾けて聴く。
4. これまでの学びを踏まえ、本時をふり返る。	・自身の考えを見つめ直し、考えを修正する。